

令和6年度 三股町立三股小学校 自己評価・学校関係者評価

学校経営ビジョン:～みんなが まいにち たのしい 学校～ みんなで三股小

4段階評価 〈 4:期待以上、3:ほぼ期待通り、2:やや期待を下回る、1:改善を要する 〉

項目	本年度の重点目標と目標達成のための手段	手段	結果及び改善策等 〈 ●は課題や次年度への方策等〉	自己評価		関係者評価	学校関係者評価
豊かな心の育成と基本的な生活習慣の確立	■目標 教師と児童、児童同士の信頼関係を育てるとともに、きまりやマナーを守る態度や危険回避能力等を育成する。 ■手段 1 差別やいじめを許さない人権教育や命を大切に する教育の推進と望ましい言動の称賛(ピアサポ ートの推進、さん付け呼びの徹底等) 2 教育相談の計画的な実施と情報共有、諸問題 への組織的な早期対応 3 積極的な生徒指導の充実と基本的な生活習慣 の指導の徹底(挨拶、廊下歩行、履物揃え)、 「みまたの日」の充実(三股町児童生徒憲章朗 誦 等) 4 情報モラルの実態把握とモラル教育の推進 5 インクルーシブ教育環境の整備と道徳教育の 充実を核とした思いやりの心の育成 6 関係機関との連携及び専門スタッフ(SC・SS W)の活用	1	○ 始業式などで、校長が差別やいじめを防止についての人権教育、生徒指導主事による校内生活指導を行った。また、模範となる行いをした児童を表彰した。ピア・サポートについては、定期的に提案し、実践を重ねることができた。児童の気になる言動に対して、素早く対応するとともに、全職員で情報を共有し、組織として早期解決を目指してきた。 ● 「さん」付けの徹底や丁寧な言葉遣いの指導を継続する必要がある。	3.2	3.1	3.6	・課題に対して学校全体で取り組むことができている。 ・不登校への抵抗意識が薄らいできており、今後も増えていくのではないか。その前に何か防ぐ方法があるかとい い。 ・繊細な子どもさんが増えて いるが親身になってご指導を いただき有り難い。 ・悩んでいる児童へ寄り添い 一人でも多くの子が学校に 来られるようにしてほしい。 ・スクールカウンセラーに相 談できてよかったとの声が聞 かれた。 ・SNSの問題が今後増えて いくことへの不安がある。家 庭でうまく注意できるよう保 護者も勉強する機会がある とよい。 ・「三つ子の魂百まで」とあ る。個人差はあるが、幼児か ら思いやり・生活習慣等につ いて声をかけていくことが大 切。
		2	○ 学校生活アンケートを実施し、教育相談を行うことで、日常の悩みを把握し、諸問題への解決を図ることができた。定期的に、全職員で児童への適切な支援・指導方針について協議し、共通理解を図っている。 ● 児童の状況について共通認識し、児童の様子を中長期的に見届けていく必要がある。諸問題の解決まで寄り添う指導・支援の在り方を検討していく必要がある。	3.5			
		3	○ 各学年・学級での繰り返しの指導や集会・校内放送での呼びかけにより、挨拶・会釈、静かな廊下歩行が少しずつ身についてきた。声掛けを五・七・五で分かりやすい言葉にした。清掃指導、朝のボランティア活動、委員会活動を積極的に行えた。学年・学級での教室環境の整備に努めてきた。 ○ 挨拶・会釈、廊下歩行、校内での安全な過ごし方の指導を継続していく必要がある。	3.0			
		4	○ 道徳の時間や総合的な学習の時間、非行防止教室などの中で、情報モラルについて学ばせることができた。 ● 情報モラル教育の在り方について、年間指導計画の確認など校内で検討していく必要がある。	2.8			
		5	○ 学年研修等で授業づくりや通級指導の在り方について共通理解を図ることができた。児童が感じる苦手な部分を少しずつ減らしていく方向で指導を継続したい。 ● 支援学級と交流学級の情報共有が必要である。特別支援学級について、通常学級児童への説明が必要である。	2.8			
		6	○ 来校回数が増え、SC(スクールカウンセラー)を活用し、児童・保護者・教職員の相談に対応することができた。 ● SSW(スクールソーシャルワーカー)の効果的な活用の在り方についても検討していく必要がある。	3.4			
学力向上と指導方法の工夫改善	■目標 「進んで自分の考えを表現できる児童の育成」 ～NINOを活用した児童理解と授業の工夫・改善を通して～ ■手段 1 4+4のチェックポイントを意識した分かる授業 づくりと習熟の時間の確保 2 各種学力調査及び NINO 等の分析と授業改善 への活用(応用ドリル等の計画的実施) 3 学びに向かう力の育成とICTの有効活用 4 家庭学習の見届けの徹底と家庭との連携による習慣化 5 図書室の活用と読書活動の習慣化(量と質の バランス)	1	○「4+4」と「ひなたの学び」を意識した授業実践について、主題研修や、日々の教材研究を通して、授業力向上を図ることができた。 ○「ひなたの学び」について、参観日に説明を行い、「学びに向かう主体的な態度の育成」の必要性について、伝達することができた。 ○本時の内容によって、学び合いの時間や習熟の時間をどのように確保していくのか、選択しながら実践を行うことができた。	3.1	3.0	3.4	・時代に合わせて教育も少し ずつ変化し、指導方法もそれ に合わせて工夫されている。 ・学力向上に向けて全職員で 取り組んでいただき頭が下 がる。 ・学校でいろいろな取組をさ れていることに驚いた。保護 者にも取組を知っていただ き、家庭でもそれをいかして 取り組めればもっと学力が向 上するのではないか。 ・パソコンの活用と同時にコ ミュニケーション能力も大切 になってくる。研究主題をさ らに深めてもらいたい。 ・今のニーズに合わせて授業 をしていこうという姿勢がう かがえた。学力が向上したこ とにその努力が見えた。学力 差も縮まっていくとよい。
		2	○児童アンケートの実施やNINOの結果分析により、児童の実態を捉え、授業改善に一人一人取り組むことができた。 ○昨年度の反省をもとに、NINOの結果分析の時間を確保し、各学年・学級の課題を確認することができた。 ○授業改善の方法として、教師が授業を公開し、授業に関する意見出してもらい、授業改善に生かす時間を確保することができた。 ○月1時間設定した「かんがえ～るタイム」を活用し、国語科の学習内容の習熟を図る時間を設定することができた。 ●「表現できる児童の育成」を目標にしているが、自信がなく発表できなかったり、授業に対して受け身の態度で参加したりしている児童の姿も見られるので、今後も授業改善に務めていきたい。	2.8			
		3	○Google 関連ソフトを活用したり、デジタル教科書を活用したりすることで、授業が効率的に進められている。 ●学校では ICT 機器を積極的に活用しているが、その状況は家庭に伝わりにくい。活用場面を家庭でも見てもらえるような機会(持ち帰っ ての活用、参観日での使用等)を設定していきたい。				
		4	○家庭学習の習慣化が図れている児童が多い。学習内容、基礎学力の定着のためには、家庭学習を通した反復練習がとても重要である。 家庭と学校で連携し、宿題の取り組みの質の向上を目指す。 ○今後も、各家庭に「宿題を終えたかの見届け(見て確認)」を徹底していただきたい。	2.8			
		5	○図書委員会の色々なイベント企画により、楽しんで読書に親しめている児童が多い。 ●学年の発達段階にあった本を読めるようになってほしい。長い文章についてもチャレンジしてみるように声掛けをしていきたい。	3.1			

体力向上と健康の保持増進	■目標 進んで運動に親しみ健康な生活を営む技能や態度の向上を図る。 ■手段 1 スクールスポーツプランに基づいた体育指導の充実(サーキットトレーニング等の位置づけ) 2 体育行事の充実及び日常的な外遊びの奨励 3 栄養教諭と連携した「食」に関する指導の充実 4 諸検査の結果を生かしたきめ細かな保健指導の充実と健康的な望ましい生活習慣の醸成	1	○ 年度当初に本校のスクールスポーツプランについての確認を行い、実態を把握し、体育指導に生かせるようにした。また、全学年で水泳指導及び持久走を実施し、体力の向上を図ることができた。 ● サークットトレーニングの中から授業の内容に合った強化トレーニングを紹介し、授業で生かせるようにしていきたい。 ● 授業の始めと終わりの立腰の姿勢はできるが、授業中の姿勢のくずれが気になる。立腰の常時指導を工夫していく必要がある。	2.8	3.2	3.5	・体力差を縮めることは難しいが、みんなが少しでもやる気をもって体を動かしていければよい。 ・子どもたちの体のことについて様々な取組がされている。子ども自身の意識を高めるためにも継続してほしい。 ・体力向上・健康の保持、どちらも興味・関心をもたせ本人のやる気を引き出すために専門的な指導や体験的なものが取り入れられている。 ・むし歯の治療率アップがすばらしい。 ・食育がしっかりできておりよかった。 ・夏の気温が高い時期に体を動かす時間ができ、スポーツフェスタの練習にスムーズにつながるとうい。 ・外部の専門家を積極的に取り入れることで先生方の負担も減らせると思う。
		2	○ スポーツフェスタは、今年度も全校参加での午前中開催で実施できた。持久走大会は、校内で2学年ずつの開催にしたことで、予行練習や延期時の心配や負担を減らすことができた。 ○ 1月には、運動場にジャンピングボードを設置することで、児童の縄跳びに対する意欲を高め、体力向上を図ることができた。 ● 気候の変化により6～9月の熱中症指数が高く、昼休みの外遊びができない日が続いた。また、午後の屋外での体育の授業等では、熱中症予防に十分配慮し、対策をとりながらの実施となったため、運動量は少なくなった。	3.0			
		3	○ 栄養教諭との連携・役割分担をしながら、食育授業等の「食」に関する指導の充実を図ることができた。 ○ 弁当の日を計画通り、1,3学期に実施し、「弁当の日便り」で児童や保護者の感想を家庭に伝えることができた。 ○ 毎月19日の食育の日には、給食の時間の放送を使って、計画的に全校児童に指導することができた。	3.6			
		4	○ 身体計測の結果をもとに机・いすの号数を算出し、年度当初に全職員で調整を行い、立腰指導につなげることができた。 ○ 給食後の歯みがきに加え、3,4年生は歯科衛生士を招いて指導を実施した。5年生は全国歯みがき大会に参加し、歯磨きに対する意識を高め、習慣化に役立てることができた。 ○ 1年生では専門家を招いての手洗い指導を実施し、常時指導と合わせて継続的な実践につなげることができた。 ● 歯の治療に関して家庭に3回啓発を行ったが、治療率がなかなか上がらなかった。治療率の向上には難しさがある。	3.3			

開かれた学校づくり	■目標 学校・家庭・地域・関係機関等との連携を推進し、協力し合える関係づくりに努め、地域の中の学校としての信頼を確立する。 ■手段 1 将来の地域を担う人材を育むふるさと教育及びキャリア教育の推進(三股好きな子の育成) 2 家庭や地域等との連携・協力による効果的な教育活動の実施(学校運営協議会) 3 学校からの情報発信(ホームページの充実)と家庭や地域からの情報収集	1	○生活科や総合的な学習の時間を中心に三股町の人材や環境を活用した学習を進めることができた。 ●「三股町児童生徒憲章」をもとに、全校や各学級で取組を工夫していく必要がある。	3.0	3.0	3.5	・外部の協力はどの分野でも効果が大きい。棒踊りは毎年感心させられる。 ・キャリア教育がこれから大切になってくと思う。 ・各学年に合わせた取組ができている。地域のことに関心をもち、知ることは地元愛にもつながる。 ・「みまたんカルタ」のできばえがすばらしい。 ・ホームページ更新は大変だが信頼につながる。 ・ホームページが楽しみである。今後も続けてほしい。 ・学校運営協議会も協力体制を整えたい。
		2	○生活科(まちたんけん)や総合的な学習の時間(様々な職業、福祉、棒踊りなど)、教科等で地域の人材を活用した学習を進めることができた。 ●活用した内容(人材等)については、確実に引継ぎできるようにしておく。	2.8			
		3	○安心・安全メールで各家庭に必要な情報や予定変更を知らせることができた。 ○大きな行事を中心にホームページの更新をすることができた。	3.1			
教職員の資質向上と働き方改革	■目標 子どもによりよい授業を提供するために、教職員一人一人の資質を向上させるとともに、よりよい職場環境を目指す。 ■手段 1 現職教育におけるOJT等の職員研修の工夫と充実 2 キャリアデザインやライフプランに応じた人材育成 3 コンプライアンスの徹底と働き方改革の推進(コンプライアンス推進委員会等の活用・時間外業務への意識改革:上限時間の目標は月45時間以内に)	1	○ 主題研究を中心に、お互いの授業を公開し合い、授業力向上に努めることができた。また、指導教諭が中心となった勉強会や体育振興指導教員による水泳研修、町教委によるNINO(認知能力検査)の効果的な活用に関する研修、三股町人権教育研修会での授業公開など学校内外の関係機関とも協力しながら資質向上を図ることができた。	3.1	3.1	3.6	・先生方の研修が充実しており、資質向上につながっている。 ・先生にとって一番大切なことは授業力の向上。研究授業など大変だと思いが続けてほしい。 ・教職員は学校や子どものことを深く考えているからこそ手間をかけてしまい、結果的に時間が足りなくなる。 ・コンプライアンス問題は大変だと思うが、日常的に意識してもらうことが大切である。通信が目につくところにあるのはよい取組である。 ・少しでも先生方に公私とも余裕があればよい。 ・PTAとしてもいろいろな場面で協力をしていきたい。
		2	○ 教職員評価に係るミーティングやフィードバックを通し、個々の課題やライフプランに応じたアドバイスをを行った。 ● 研修履歴に関する新しいシステムの研修を行ったが、導入初年度でもあり不具合が多く効果的に活用するには至らなかった。	2.9			
		3	○ 県教委発行のコンプライアンス通信を目につくところに掲示し注意喚起を行った。チェックシートを活用し自己評価や学校全体についての評価を行うとともに、まとめたものを周知することによって課題を明確にすることができた。 ○ 講師を招いてコンプライアンス研修を行い、不祥事を防止するための方策についての協議などをとおして意識の向上を図ることができた。 ● 行事の削減・縮小を通して業務改善が図られたが、繁忙期の超過勤務時間が45時間を超える職員が増える傾向にある。更なる業務の効率化を図っていく必要がある。	3.4			